

災害の現場を見て支援にわく力

医学部看護学科3年 大竹口友香・井上いぶき

私たちが最初に現地（岩手県陸前高田市）に着いたときに見て衝撃を受けたのは、どうしたらこのようになってしまうのかと思わず考えてしまうほどに、跡形もなく崩れた民家や施設などの瓦礫の山が、目の前に広がっている光景だった。メディアで放送されていたものを見ていたときは現地に行かないと全然実感なんてわからないだろうと思っていたのに、実際に目の当たりにすると、むしろそのほうが現実味はなく、信じられない思いだった。まだやっと道路が少し整備された状態で、他はほとんど手をつけていない瓦礫の山であり、被災者の方々の気持ちは計り知れないものであると痛感した。私達は広田小学校へ行ったが、まだ十分に電気もガスも復旧しておらず、被災者の方々が生活されている各教室は日中でも光が入りにくい場所であるために薄暗かった。人として最低限の生活を送ることはこれほどまでに大変なことだったのかと実感させられる状態であった。

そんな中で、私たちは小さなお祭りを手伝った。きっかけは本学医学部看護学科の酒井先生の「子どもたちがのびのびと遊ぶことができる時間をつくりたい」という言葉であったが、実際避難所の子どもたちは、数少ない遊び道具を上手に利用して元気に外で遊んでおり、それを最初に見たときは、震災の影響を感じさせない力に感銘を受けた。しかし時間が経つにつれ少しずつ、子どもたちの様子は大人を心配させないようにと踏ん張っているから元気も含まれている、ということにも気づいた。無料で配る屋台の綿飴や焼きそばに最初はあまり近づいてこなかったり、気ぐるみを遠巻きに見ていたり…そんな様子が、いつのまにか素直に甘えることができなくなってしまったことを表しているようで、気づいたときは胸が痛んだ。しかも、自分たちがなんとか子どもたちに楽しんでもらおうと思っていたのに、気がつけば逆に子どもたちに元気を分けてもらっていることに後から気づき、情けない気持ちにもなった。きちんと列

で並んで待ち、「ありがとう」と笑顔で応えてくれる子どもたちに、無力感を感じていた私達は、暖かい気持ちと、がんばろうという力を逆にわけてもらったのである。

災害ボランティアに参加して、自分達に何かを変える大きな力はないけれど何かしようという思いを行動に移すことの大切さを学んだ。この学びを多くの人に伝えることが今の私達にできることである。思いを行動に移すことを忘れず、これからの看護活動に生かしていきたい。